

日向路



十月の中旬日向に一泊の旅をした。定年を迎えてこの夏から郷里に落ちついた私たち夫婦は、秋のドライブを楽しもうと全国公共の宿「の案内書から日向ハイツを選んだ。

当日は好天に恵まれ、開通したばかりの加久藤トンネルを抜けて人吉まで行った。地図を眺めて、そこから椎葉を通って行く予定を立てていたのだが、人吉で聞くとその道はとても山深く大変で、明るいうちには着くまいと聞かされ、急遽えびのに戻り、宮崎経由で行くことに変更した。宮崎の一つ葉道路からの、のびやかに広がる日向灘の景観を楽しみ、夕方にはどうやら目的地に着いた。

翌朝、フロントで案内書に挙げられていた伊勢が浜と妙国寺庭園への道順を聞くと、この下を左に降りると「馬が背」という見どころがあり、その先が妙国寺になるといつ。

馬が背では、駐車場から灯台への道と岸壁への道とに分かれていて、私たちは岸壁の方を選んだ。岬の裏手の細い道を進むと、海に向かって深い細い亀裂の入った場所に出た。両側はびっしりとした柱状列石で、その隙間に深い碧の海があり両壁に白い泡を噛ませていた。外側は松の緑が日に映えて、その奇景の美しさは東尋坊以上ではないかと思った。岬の先端からの眺めも絶景で、ここがもう少し中央に近ければ、観光化され訪れる人で混雑していることだろう。妙国寺の方はなかなか見つからず、何回も尋ねなおしてやっと裏の空き地の駐車場に車を止めることが出来た。

細い路地を抜けると、お城を思わせる立派な石垣の上に古びた風格のある山門が立っていた。石段を登ると右手にやや荒れたそんなに広くない庭があった。私たちはまさかそれが名園と思わず、その奥にある

のかと塀にそって歩いたがその先はお墓になっていた。本堂のお参りをしてから住職さんへ、「ここがそのお庭なのか伺つて」

「この池は水が満々と湛えられている筈なのです。国の文化財に指定されてからは、自分で手を加える」とは出来ず、池も枯れ、枝垂れ桃も枯れたのに植え変えることも出来ない。荒れ放題になってしまった。遠くから見にいらつしやる方にも申し訳ないので、みなさんの声をお借りしてでも、国になんとかしてもらいたい。」

といわれ、この現状を旅行者の立場から投書してほしいと宮崎日田新聞を手渡された。庭園は自然ではない。庭園としての当然の管理は、私たち観光者のためにもなされるべきだと大いに住職さんに同情したのだった。

予定の行程には入れてなかったが、ここまで来たのだから牧水の生家も見たいと夫に頼んだ。椎葉に向かって西の山奥へと進む。三十分ほどで着いた。

耳川の上流のせせらぎを前にした、街道沿いの素朴な民家が、牧水の祖父、父二代が医者として住み、牧

水が生まれた家であった。こんなに山深い所にも患者がいたというのも不思議に思えるほどの僻地であった。牧水の祖父は埼玉の所沢の人で、たまたま友人を訪ねてきてこの風景に魅せられて、「ここに定住したのだという。」

振り返れば尾鈴の山が霧を抱いてあった。水墨画のようなその佇まいに、朝夕この山を眺めて暮らすことに、全ての栄達を捨てたその祖父の心情もつくづく理解できた。私とても、もし口糊のの憂いが無ければそつしたかもしれないと思つたほどだ。

ただ残念だったのは、眼前の丘の木々が切り倒されて、公園になってしまつていたことだ。牧水の生家を目玉としての町起こしをしようといつたことのように、牧水の生家を訪れる私たちとしては興ざめのことで、私たちとしては牧水の眺めた山、その祖父の魅せられた山を眺めたいのだが、そのところが理解されていないらしい。生家からの視角を外れた川下や同じ街道沿いに作ることも出来たのではと思つのだが。隣接の牧水記念館で遺品や牧水の書いた軸を見た。そのやさしい筆づかいになる、私たちになじみ深い

歌々を口ずさむと、しみじみとした感傷が湧いてくる。帰りは耳川沿いに下って、神武天皇の東征出葬の地との伝説の美々津へと向かった。川沿いの道路はまだ所々が整備中で、道幅の変化に悩まされたものの、自然の流れの美しさを堪能した。道路が完備した後、この自然を大切にしてほしいものだ。

美々津に着いた。道路脇に車を止め、海を眺めている子連れの一二人の女の人に港への道を尋ねた。ところが丁度一時間ほど前に起きた九州南海地震の津波警報のため海岸には行くことは禁止されているという。車の中にいた私たちは全然気がつかなかった。ラジオを聞いてもいなかったのだ。私たちも海に目を移したが津波らしい気配はなかった。

さればと一踏帰途につく。宮崎からは高速に乗らず霧島経由で帰ることにした。地図とにらめっこで国道10号線から268号線、275号線と進む。山奥になって途中から前後に車が無くなった。日は傾きはじめ心細くなってきたころやっと霧島神宮に着いた。

朱塗りの大鳥居をくぐり、石段の手前で車を降りた。二人ともやや疲れて無言で石段を登る。境内には参

拝客もちらほら見えて、夕べの気配に神殿は一段と厳かである。高千穂の峰に降臨なさったという「にぎのみこと」をおまつりしてあるとのこと。日向路はすべて古事記の世界とも言える。

日が沈んだ頃宮之城に入った。メーターを覗きこんだ夫が540キロも走ったと言った。出無精の夫にしては前代未聞の旅行である。地図を閉じ座席にゆっくりと身を沈めた。まだ知らぬ所ばかりの定年生活のこと、次は何処にしようかと考えるだけでも楽しいなど思いながら。

平成7年11月